

高経年団地のコミュニティ形成に向けた実証実験「あけテラ芸術祭 2023」の評価と考察 公的集合住宅団地の集約化手法に関する研究その10

準会員 ○長津咲希* 正会員 安倍ひより**
正会員 藪谷祐介*** 正会員 山田信博****
正会員 梶田美結*****

集約化 地域活動 公的集合住宅団地
実証実験評価 共用空間 コミュニティデザイン

1. 研究の背景と目的

前編では、団地内外居住者のコミュニティ形成を目的とした筆者らによる実証実験「あけテラ芸術祭 2023」(以下、芸術祭)の概要について報告した。本編では、アンケート調査をもとに芸術祭のプログラムが団地内外居住者のコミュニティ形成における有効性を検証することを目的とする。

2. 調査方法

2023年8月25日(以下、25日)、8月26日(以下、26日)の2日間にわたり芸術祭来場者および参加者に対してアンケート調査を実施した(表1)。アンケートは団地内居住者(以下、団地内)と団地外来場者(以下、団地外)の2種類作成し、回答依頼時に団地居住の有無を確認した上で該当するアンケート用紙を配布した。結果、25日の回答数は団地内が23、団地外が15となった。26日の回答数は団地内が8、団地外が32となった。

3. アンケート調査結果

3-1 回答者の属性

団地内の年齢は、両日ともに65歳以上が多く見られた(図1)。一方団地外は、両日ともに40代以下が半数以上を占めている。これは、企画や運営に参加した高校生やその保護者が多かったからだと考えられる。

3-2 イベントの参加理由

イベントの参加理由は、団地内は「芸術祭に興味があったから」が両日とも多かった。同様に「飲食物を販売しているから」が25日は多く、「ステージ・パフォーマンスに興味があったから」が26日は多かった(図2)。団地外は、両日とも「ステージ・パフォーマンスに興味があったから」が最も多かった。

3-3 イベントで何をして過ごしたか

団地内外ともに、「ステージ・パフォーマンス鑑賞」「飲食物の購入」が高い結果を示していた(図3)。「ものづくり体験」をした人はほとんど見られなかった。

3-4 イベントの評価とその理由

イベントの評価としては、団地内外両日とも70%以上が「とても良かった」「良かった」を選択していることから全体的に評価は高く、特に26日の方が団地内外ともによ

表1 アンケート調査概要

配布日時	2023年8月25日(金)	2023年8月26日(土)
場所	あけテラ芸術祭現地(URあけぼの団地集会所前広場)にて配布・回収	
配布対象	あけテラ芸術祭来場者および参加者 (団地内住民/団地外来場者で異なるアンケートを配布)	
回収数	団地住民: 23枚(有効回答: 23枚) 団地外来訪者: 15枚(有効回答: 15枚)	団地内住民: 8枚(有効回答: 8枚) 団地外来訪者: 32枚(有効回答: 32枚)
設問内容	【団地内外共通設問】 年齢/性別/職業/イベント同伴者/イベント滞在(予定)時間/イベント参加理由/普段の芸術文化に触れる機会/イベントでの過ごし方/イベント全体の評価・理由/イベントで新しい人と知り合う機会の有無/今後の参加意向/あけぼの団地で訪れた場所・活動・イベント など 【団地内住民のみ設問】 近隣住民との挨拶や会話の頻度/これまでの地域活動への参加状況 など 【団地外来訪者のみ設問】 あけぼの団地に居住する家族や知り合いの有無/あけぼの団地への来訪有無/イベントを何で知ったか	

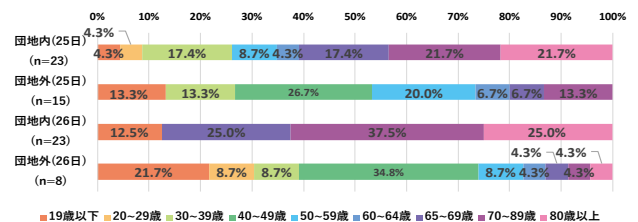


図1 年齢

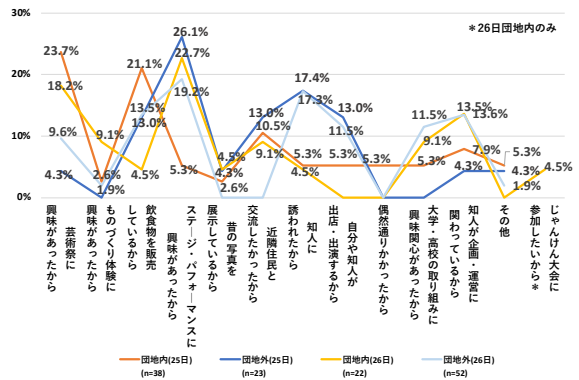


図2 イベントの参加理由

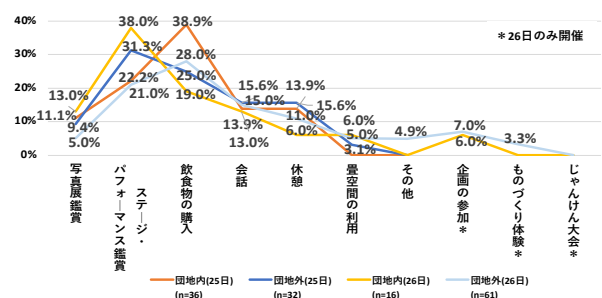


図3 イベントで何をして過ごしたか

り高評価となる傾向が見られた（図 4）。評価理由としては、25 日は団地内外ともに「居心地のよい空間だったから」を選択している人が最も多く、団地内では次いで「団地に活気や賑わいが生まれたから」と「飲食物の販売があったから」が多かった（図 5）。団地外では次いで「様々なステージ・パフォーマンスが鑑賞できたから」が多かった。26 日は、団地内は「団地に活気や賑わいが生まれたから」が最も多く、団地外は「飲食物の販売があったから」が最も多かった。また、団地内外ともに若い世代の参加が高く評価されていた。

3-5 新しい人と知り合う機会

イベントで新しい人と知り合う機会があったかという項目では、団地内外どちらも 26 日の方がより新しい人と出会う機会を得ている（図 6）。これは、25 日はパフォーマンスがメインとなっており他の人と会話をする機会が少なかったことが影響していると考えられる。多くの人と知り合ったと答えている人も団地内では 25 日、団地外では 26 日で見られた。

3-6 今後の関与意向

今後のイベントの企画・運営への関与意向として、25 日の団地内は「どちらとも言えない」を選択している人が最も多いが、26 日は積極的な回答を選択している人が約半数を占めており、母数は少ないがイベントへの関与意向が高い人が一定数存在していることが確認できた（図 7）。団地外は、両日ともに約 70%の人が「どちらとも言えない」「携わりたくない」を選択しており、企画・運営への関わりに対してはあまり積極的でない人が多いことが分かり、この点が今後の課題であると考えられる。

4. 芸術祭の有効性と課題点

今回のプログラムでは団地に活気や賑わいが生まれたことが団地住民に高く評価されていた。また、団地外はステージ・パフォーマンスに興味を持って参加した人が多く、評価理由としても多くの人から選択されていることが分かった。団地の共用空間を団地外居住者がステージ・パフォーマンス会場として活用し、その結果団地内に賑わいが生まれ、団地内住民の評価につながっていると考えられる。また、団地住民のイベントの参加理由として芸術祭に興味があった人が多く見られたことから、今回の芸術祭というテーマが団地内にとって有効である可能性が示唆された。一方で、団地内外ともにイベントでの過ごし方や参加理由、評価理由の項目でものづくり体験や創作活動を選択している人は少なく、自分で手を動かすよりも鑑賞することに関心を抱いている人が多い

と考えられる。そのため、今後は芸術鑑賞に関連した企画を中心にプログラムを検討することが有効だと考える。

今後の関与意向については、半数以上が消極的だということが分かった。しかし、高齢化が進んでいるあけぼの団地において、企画・運営に携わりたいと答えた人が団地内外ともに一定数いるという点は評価できると考える。積極的な意向を持つ人々に、企画・運営に関わってもらえるような枠組みを作ることが今後の課題点である。ただし、今回の調査では 26 日の団地内の回収数が少なかったことから、更なる検証が必要である。

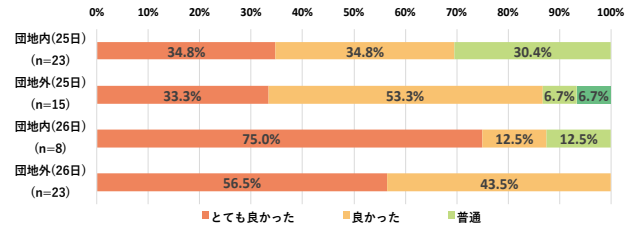


図 4 イベントの評価

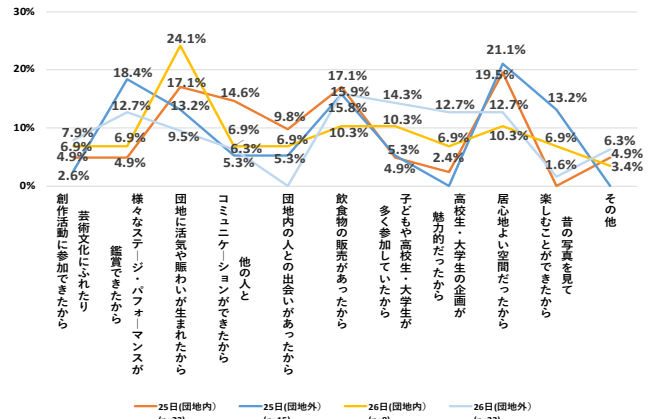


図 5 イベントの評価理由

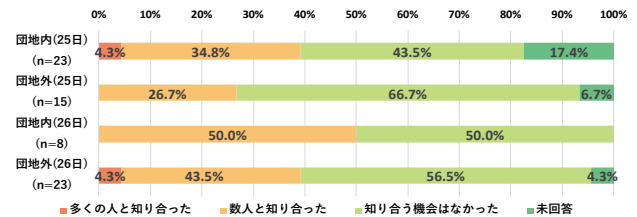


図 6 新しい人と知り合う機会

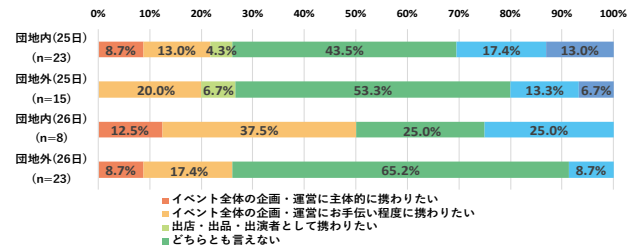


図 7 今後のイベントの企画・運営への関与意向

* 富山大学芸術文化学部 学部生
 ** 富山大学人文社会芸術総合研究科 大学院生
 *** 富山大学学術研究部芸術文化学系 講師・博士
 **** 札幌市立大学デザイン学部 准教授・博士
 ***** バウハウス丸栄

* Undergraduate, Faculty of Art and Design, Univ. of Toyama
 ** Students, Graduate School of Art and Design, Univ. of Toyama
 *** Senior Assist. Prof., Faculty of Art and Design, Univ. of Toyama, Doctor of Design
 **** Associate Prof., School of Design, Sapporo City Univ., Ph.D.
 ***** Bauhaus Maruei